

Program

- ◆ ロッシーニ 歌劇『セビリアの理髪師』より序曲
ROSSINI / “The Barber of Seville” Overture

- ◆ モーツァルト ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 変ホ長調 K.364
MOZART / Sinfonia Concertante for Violin and Viola in E-flat major
I. Allegro maestoso
II. Andante
III. Presto

[休憩 Intermission 15 minutes]

- 医療講演：「作曲家の病と音楽」 小林 修三

- ◆ ベートーヴェン 交響曲第7番 イ長調 Op.92
BEETHOVEN / Symphony No.7 in A major
I. Poco Sostenuto-Vivace
II. Allegretto
III. Presto, assai meno presto
IV. Allegro con brio

演奏：湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団

指揮：和田 一樹

ソリスト：藤原 浜雄（ヴァイオリン）

須田 祥子（ヴィオラ）

[感染対策について]

- ✦ 本日の公演は感染対策を施し実施いたします。ご理解、ご協力賜りますようお願い申し上げます。
- ✦ 休憩時間は、換気のため全屏を開放いたします
- ✦ 終演は16時10分頃を予定しております。
終演後ホールからご退場いただきます際は、密を避けるため、分散退場にご協力くださいますようお願いいたします。

ご挨拶

NPO法人 癒しの医療を考える会
理事長 小林 修三

NPO法人癒しの医療を考える会は、「癒しの医療を求めて医療者と患者さんが一体となり、病気を克服していくこと」の実現を目指して、湘南地域を中心に、春と秋の年2回、医療講演と一体となったクラシック音楽演奏会を開催しています。音楽の持つ力を最大限生かして「明日に生きる勇気と希望を持とう」を合言葉にして活動しています。

おもいやりと共感のある、温かな癒す医療は、組織の肥大化や医療改革に伴って、運営効率をあげなくてはならなくなった今こそ本当に必要です。患者さんの目をみて話すこと、身体に触れること、注意深く選んだ言葉による心地よさや安心感の提供というような基本的なところから始まるはずで。先端医療の推進は「弱者を置き去りにしない」ことと両立させなくてはなりません。地域でそれぞれの医療施設が協力しあって優しい病院作りを考えていきたいと願っています。

ギリシア神話に出てくる医神はアスクレピオスです。その父親がアポロンで医術と芸術は切っても切れない関係とされ、音楽を通して病を癒す試みがなされていたアスクレピオスの夫人はエピソードと呼ばれ、看護と鎮痛の神様とされています。二人には5人の息子・娘がいました。長男マカオンは外科医、次男ポダレイリオスは内科医、長女ヒュゲイアは予防、次女パナケイアは万能薬、三女イアソは治療を願った神様として考えられています。

病院の歴史は6世紀イタリアのモンテカッシーノ修道院がその原形と考えられ、中世の時代には、裏庭で作られた薬草やワインなどが提供され治療薬として用いられていたそうです。パンとワイン、そして暖かな言葉と額に当てられた手の温もりで人々は癒されたとされます。

演奏会は2000年5月から開催され、最初は室内楽でしたが、オーケストラとしては2002年に、今や世界的大指揮者、芸大指揮科を卒業して間もない山田和樹氏を迎えモーツァルト交響曲第40番からスタートし都合8年間にわたって演奏していただきました。2016年には現在の湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団となり、来年は25回の記念演奏会となります。新たな取り組みで今後も長く継続していきたいと考えています。もし、今回の演奏会がお気にめされましたら同封の振込用紙にご寄付をいただければ幸いです。素晴らしい一流の演奏家やスタッフには、こうした趣旨に賛同して集まっていたいただいておりますが、もっと報いて差し上げたく思っています。また、来年25回の演奏会では可能でしたら多感な小学校高学年の生徒さんを無料で招待できればと現在計画しています。

今後とも当法人や湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団の活動をよろしくご支援くださいませ。



© RINZO

指揮者 和田 一樹 *Kazuki Wada*

東京都中野区出身。
2011年、ブラジルロンドリーナ音楽祭にて優秀賞受賞。2015年ルーマニアで開催された第6回ブカレスト国際指揮者コンクールにて準優勝、2017年にはヤシ・モルドヴァ・フィルハーモニー管弦楽団を指揮しヨーロッパデビューを果たす。オーケストラと聴衆から熱狂的に支持され、楽団の総監督より「最年少最優秀客演指揮者」の称号を受ける。以後、毎シーズンの客演を続けている。
ドラマ「のだめカンタービレ」、映画「マエストロ！」等で、玉木宏、竹中直人、西田敏行、葵わかなに指揮指導を行った。
これまでに、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、群馬交響楽団、東京佼成ウインドオーケストラ、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、セントラル愛知交響楽団、富士山静岡交響楽団、ジョルジュ・エネスク・フィルハーモニー管弦楽団、ヤシ・モルドヴァ・フィルハーモニー管弦楽団など国内外で指揮活動を展開している。



ソリスト（ヴァイオリン） 藤原 浜雄 *Hamao Fujiwara*

鎌倉生まれ。3歳より母にヴァイオリンの手ほどきを受ける。その後、桐朋学園大学にて鷺見三郎、江藤俊哉、海野義雄、齋藤秀雄の諸氏に、ジュリアード音楽院にてJ・フックス氏に師事。内外数多くの著名なコンクールにおいて輝かしい入賞歴を持つ。留学以来20年以上にわたるアメリカ合衆国に居を構え、ソロ・室内楽その他多方面において活躍。1992年11月、読売日本交響楽団の首席ソロ・コンサートマスターに就任すべく日本に帰国。それまでのジュリアード音楽院、マンハッタン音楽院、ミシガン大学音楽学部教授などの経験を活かし、桐朋学園大学特任教授、東京音楽大学客員教授として後進の指導にもあたっている。



© 平野晋子

ソリスト（ヴィオラ） 須田 祥子 *Sachiko Suda*

桐朋学園大学在学中にヴァイオリンからヴィオラに転向、同大学を首席で卒業。室谷高廣、岡田仲夫の各氏に師事。第23回ヴィットリオ・グイ国際コンクールを始めとする多数のコンクールで第1位優勝。2015年5月の「題名のない音楽会」及び2016年11月の「ららクラシック」のヴィオラ特集、同月の「題名のない音楽会」の「弦楽四重奏特集」に出演。また2016年1月には「報道ステーション」で白川永柱群の前からヴィオラだけのソロ演奏が生中継された。
また、NHK-FM「きらクラ」の水戸での公開収録、2020年には6時間半を超える生放送名物番組「今日是一日〇〇三昧」のピオラ特集にゲスト出演。現在、東京フィルハーモニー交響楽団首席奏者、日本センチュリー交響楽団首席客演奏者、「アクロス弦楽合奏団」、「ザ・シンフォニエッタみよし」のメンバーを務める他、ピオラ演奏集団「SDA48」を主宰。洗足学園音楽大学非常勤講師。CD「ピオラは歌う」シリーズ、SDA48では「びおらざんまい」をリリース。レッシュ4スタンス理論マスター級トレーナー。

湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団

湘南鎌倉フィルハーモニック管弦楽団は2016年湘南の地に誕生したプロオーケストラです。日本のクラシック音楽界をリードするメンバーが多数集い、NPO法人癒しの医療を考える会の趣旨に賛同し、会とともに活動しています。



写真：2021年春の演奏会より

コンサートマスター 藤原 浜雄（ベートーヴェン / 交響曲第7番）
崎谷 直人（ロッシーニ / 「セビリアの理髪師」より序曲、モーツァルト / ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲）

Vn1	藤原 浜雄 崎谷 直人	Va	須田 祥子 加藤 大輔 高木 真悠子 宇根 京子 前田 尚徳 坂口 正明 塩澤 菜美 小野 唯 草川 研二 竹部 朱里 飯塚 歩夢	Fl	難波 薫 杉山 翼	Per	小島 光 菊池 悠平 瀧澤 綾子
			羽藤 尚子 福田 道子 眞岩 紘子	Ob	岡 北斗 山田 涼子		
		Vc	小川 和久 広田 勇樹 松浦 健太郎 丸山 泰生	Cl	亀井 良信 佐藤 由紀		
				Fg	依田 晃宣 柿沼 麻美		
Vn2	遠藤 香奈子 景澤 恵子 三浦 知香子 塩川 翔子 菊川 穂乃佳 中島 裕子 井上 桐子 大谷 俊哉	Cb	西山 真二 宮坂 典幸 三間 達朗	Hn	日橋 辰朗 端山 隆太		
				Tp	伊藤 駿 山川 永太郎		

ロッシーニ *Gioachino Antonio Rossini* (1792 – 1868)

歌劇「セビリアの理髪師」より序曲

“The Barber of Seville” Overture

初演：1816年ローマにて

歌劇「セビリアの理髪師」は、筆の速さで知られるロッシーニが、24歳の時に13日で書き上げ、ロッシーニの名を不朽にした恋と財産をめぐるドタバタ喜劇の名作。全2幕3場。

序曲は軽快で親しみやすく、歌劇の序曲の中でも最も人気のある1曲。終盤は短いフレーズを繰り返しながらオーケストラ全体でクレッシェンドしていく「ロッシーニ・クレッシェンド」と呼ばれるユニークなテクニックが盛り上げ、歌劇への期待を高める。

ロッシーニは、実質の作曲活動期間が20年ほどにも関わらず、39もの歌劇を作曲している。また美食家として後年は料理の創作活動に力を注ぎ、現代風に言えば「クリエイティブな人」として活躍し、音楽界と料理界で名を残した。

モーツァルト *Wolfgang Amadeus Mozart* (1756 – 1791)

ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 変ホ長調 K.364

Sinfonia Concertante for Violin and Viola in E-flat major

作曲：1779年

初演について記録はないが、1779年、マンハイム＝パリ旅行から故郷ザルツブルクに戻ってから作曲され、ザルツブルクにて初演されたと考えられる。

協奏交響曲は、複数の独奏楽器奏者とオーケストラが演奏する演奏形式で、モーツァルトがパリを訪れた頃に管弦楽団が充実していた当地で流行していた。故郷に帰ったモーツァルトはその影響を受けて作曲したと考えられている。

ヴィオラという楽器は、ヴァイオリンとチェロの間でひっそりとしているような印象さえあるが、人の声にも似た音域をもち「人生を語るにふさわしい楽器」とも認識されており、多くの作曲家がその最晩年に作曲家人生の集大成のような遺作をヴィオラのために書いているといった事実があるほど「味のある」楽器である。

若くして神童であり、短命でもあったモーツァルトは、チェンバロやオルガン、フォルテピアノなどの鍵盤楽器の他にも、ヴァイオリンとヴィオラの名手であった。23歳のモーツァルトがヴァイオリンとヴィオラの特別な会話を聞かせてくれたようなこの協奏交響曲には、モーツァルトの5曲のヴァイオリン協奏曲にはないモーツァルト自身が書いた美しいカデンツァが残されている。

第1楽章 Allegro maestoso 変ホ長調 4分の4拍子 協奏風ソナタ形式

二組の主題からなり、第一主題は管弦楽、第二主題は二つの独奏楽器で提示される。軽やかなオーケストラの演奏に、気づけば独奏楽器が加わっている爽やかなスタートから会話が始まる。

第2楽章 Andante ハ短調 4分の3拍子 ソナタ形式

独奏楽器が、言葉を選んで語り合い美しく悲しい旋律を紡ぐ、珠玉の楽章。

第3楽章 Presto 変ホ長調 4分の2拍子 ロンド形式

明るくいきいきとした協奏曲らしく華やかな楽章。

ベートーヴェン *Ludwig van Beethoven* (1770 - 1827)

交響曲第7番 イ長調 作品92

Symphony No.7 in A major, Op.92

作曲：1811年 – 1812年

初演：1813年12月8日 ウィーン大学にてベートーヴェンの指揮によって

交響曲第6番の後に約3年の空白期間を経て、第7番と第8番が相次いで作曲された。聴覚は悪化し、精神と体の不調が続いた時期から徐々に創作意欲を取り戻した40～41歳に書かれ、初演は大成功を収めた。

各楽章で反復される単一のリズムが印象的な高揚感と生命力に溢れた曲。ワーグナーはこの曲を「舞踏の聖化」と表現した。

クロード・ルルーシュ監督の映画「愛と哀しみのボレロ」（1981年）の中に、第4楽章に振り付けられた「舞踏の聖化」を映像化したようなバレエシーンがある。ルドルフ・ヌレエフをモデルとしたダンサーは、エネルギー迸る踊りで喝采を浴びた後、続くシーンでパリの空港から亡命するのだが、そこでは、この交響曲の最後のフレーズが効果的に使われていた。1960年代のソビエト連邦から西側へ、自由への跳躍の音楽として描かれた映画のワンシーンが、昨今の緊迫感あふれ閉塞感漂う世界と重なり、音楽の持つ普遍性に思いが巡る。

ベートーヴェンの交響曲第7番は、21世紀の今も同じリズムを刻んでエネルギーを放ち、人々の心を鼓舞し、勇気を与え、心を解放するがゆえに人気なのだろうか。

第1楽章 Poco sostenuto – Vivace イ長調 4分の4拍子 - 8分の6拍子

長い序奏部に続いて、特徴的な付点のリズムにのって第一主題が現れる。楽章を通し一貫して同じリズムが繰り返され、リズムを推進力に軽快に音楽が進む。

第2楽章 Allegretto イ短調 4分の2拍子 自由な三部形式

厳粛に単一のリズムが刻まれる中、抒情的に始まり、中間部では、光が差すような希望を感じさせる展開となる。ワーグナーが「不滅のアレグレット」と呼んだ哀愁のある美しく甘美な楽章。

第3楽章 Presto – Assai meno presto ヘ長調 4分の3拍子 ロンド風のスケルツォ
活力に溢れ、弾力に富むリズムのスケルツォ主題が畳み掛け、テンポを緩めた二長調のトリオが大らかに歌う。

第4楽章 Allegro con brio イ長調 4分の2拍子 ソナタ形式

狂乱とさえ表現される疾走、乱舞する、生命力に溢れた最終楽章。